**得られる助けすべて 2017/09/24**

**マタイ 20:1-16 スティンストラ牧師**

腰はひどく曲がってしまい、指は関節炎のためにねじれさらに膨れ上がってしまった老人が、夕方暗い中を片足を引きずりながらも精一杯の早さで

家路を急いでいた。彼が普通とは違ってこんなに急ぐのは、最近は手にしたことがない硬貨を手に握り締めているためだった。つまり妻にもう一日生活するのに十分なお金を獲得できたという良き知らせを、長いこと苦しんでいる妻に知らせたいがためだった。そのお金で彼等がおいしい食事をともにする際には、彼は60分しか働いていないのに丸一日分の賃金を支払ってくれた奇妙な地主の話をしたいと思っていた。

彼女はおそらくそんな話を信じることはできないだろう。　というのは彼女はこれまで、彼がなぜ雇われなかったか、その言い訳の数々をとうとうと説明されることに慣れていたから。そのような多くのでまかせは、彼女にとって、彼がまたもや非効率的な一日を、街中で彼と同じように年をとりすぎている（あるいは若すぎる)ため、衰弱している(あるいは経験不足である)がゆえに、役立たずな、みじめな仲間たちといっしょに過ごしていたことを意味していた。　しかし、今回は彼は現金を手にしていた、そして彼がしゃべるばかげたような話はまぎれもなく真実なのだ。　そして、願わくば妻も、彼等を圧倒した本来ならもらえるべき額をはるかに上回った額を受け取ったという喜びを、分かち合ってほしかった。

彼は、いまだに事が見事に展開したことに驚いていた。　二時間前は、夕食のためのお金をまたもや稼ぐことができなくなると、彼は実に心配していた。その日の朝は仕事が必要であるという彼の必死の要求を述べたものの、いつも通り雇い主たちには馬の耳に念仏であった。　そして一日中、ほかの者たちが少しづつ時間が経過するたびに採用されていく間も、彼の貧弱な力では十分に彼の能力を訴えることができなかった。　しかし５時頃、まさに夢破れて家路につく1時間前になって、あの金持ちの男が今一度突然として現れてそこでふさぎ込んでいた幾人かに話しかけたのだ。私は得られる助けをすべて必要としており、たぶんぶどう園であなたがたにしてもらえる仕事がありそうなんだと。

遅くやってきた人々は、誰一人として給料袋にたくさんのお金が入ってくるなどということは想像もしていなかった。せいぜい小さなパンの足しにでもなればと考えた。　しかし、 雇い主はきちがいと思えるほどに気前がよく、どんなに短く働いたものでも同じ金額、つまり一日分の賃金を支払ったのだ。おそらくそのようなことはとても公平と言えるようなことではなかったが、一日の最初の方の時間に雇用されなかった者たちにとっては、大きな祝福であった。ほかの人々だってお金が必要なように、彼等だって、すくなくとも生きるために、おそらくもっとお金が必要だった。なので、法外に気前のよい地主に出会ったことは、賃金を受け取るものにとっては奇跡に遭遇することだった。つまり理にかなう範囲をはるかに超える体験をした。

ところが、このような期待もしなかった出来事に対して、だれもが幸せに感じたわけではなかった。まるまる12時間を働いたものにとっては幸せでもなんでもなく、ただ彼等の口からはなんだかんだと不平の声が飛び出してきた。彼等のとっては、最初に雇用された時に聞いたとおりの報酬を受けているとは思えなかった。彼等は仕事をもらえるかどうかの宝くじに当たった恵まれた運の良い労働者たちだと思っていた。彼等はたしかに約束された賃金が支払われたわけで、決して大金ではないにしろ彼等の家族の衣食住に必要な金額だった。しかし、気前の良すぎるぶどう園の地主の、ほんの少ししか働かなかった労働者たちへの施しを見るにつけ、彼等は賃金をもらってうれしいどころか逆に少ししか支払ってもらっていないと感じるようになってしまった。　そしてもっとボーナスをもらえるのではないだろうかという期待が消えたとたんに、彼等は一日の賃金をもらえたことが落胆になってしまったようだ。その賃金は十分な額だとは思えなくなってしまった。

なにか不義でありまた誤っていると思えるのだ。 地主が労働者みんなに同じように支払っているのは、なにかが間違っていて狂っていると思えてしまう。　同じ労働をした分に同じ金額が払われるべきであり、それならわかるのだが、異なる仕事をしているのに同じ金額が支払われているのだ。私たちが大切にしているフェアプレーの原則に反するのだ。早起きは三文の得をするべきなのだ。ただで食事にありつけるなんていうことはないのだ。受けるに値する額だけをもらえるのであり、最初から事業に加わっていた者が最高の利益を得て当然なのだ。

私たちのカルチャーや自身を正当化しようとする気持ちと結びついて、これらの考え方はとても標準的であるのだが、実はゆがんだ考えでそのような価値観を私たちは持ち込んできてしまう。しかし、奇妙なひねりの入っているこのたとえ話が示唆しているように、私たちの創造の主は彼の支配下にあるこの世界に対し、私たちの考え方とは大きく異なる何かを心に描いている。彼が創造した人々を見る場合、主は文字で書くなら 「邪悪の目」ともいうべき目をもって見るのではなく、良き物として認めることをしている。　神からの贈り物である愛と憐れみは計り知れず、公平と思われるとか受けるに値するという価値基準で授かるのではない。憐れみがあふれでてきて、豊かな命に恵まれ、だれもが尊厳や価値を授かる。父の食卓に招かれる一人一人に主人の配慮があり愛情が注がれる。食卓についたものたちが同じ救い主の体と血をいただく。

天の国に属するという特権は、誰もが一日の終わりに報酬を得ることである。普通に受け取るような給料袋の中に、12倍の永遠の命が入っているなんてことは単にありえないこと。私と神との関係が、だれかと神の関係よりさらに深くなるなどということはない。この世で隣にいた人よりイエスのためにいっしょうけんめい働いたと信じている人には天国ではよりよい隣人環境が与えられるなどということはない。あるいはいつも教会の長いすの端に座っていた自分では信心深いなどという素振りなど見せもしなかった静かな一人の女性より、多くの教会員から注目を浴びた人のほうが天国で良き環境に恵まれるなんていうこともない。天国での新しい時代の基準においては、神が与えてくださる最小のものが、実はだれもが受け取ることができる最大のものになる。というのは神は自分に属している資産をすべての子供たちのために使おうとされるからだ。私たちが好むと好まざるにかかわらず、神の一人一人への慈悲深さは比べられるようなものではない。

そして気が狂っている思ってしまうような天の父の行動を、私たちが唯ありがたいと思うようになるためには、全員がクラッカージャックのおまけをもらうとき、そのおまけが全員に同じものであった場合、それを約束違反だとして「邪悪な目」をもってみたりはしないようにしなくてはならない。だから私はこの説教を、このたとえ話を聞いてもっともよろこびそうな人の話から始めた。私たちにとって難しいのは、自分たちのことを神が見るように見ること、これだけの賃金をもらえる資格があるという者の立場ではなく、11時間も雇われるまでなにもせずにいた者、そして人間が授かっている純粋の愛から彼が何かを感じ取り、そして私たちも何か役にたったと感じることがない限り、ずっと雇われるまで待ち続けなければならない彼の立場の目で見なければならない。私たちが神の祝福には限りがあっていつも終わりのない競争をしなければならないという視点にたっている限り、私たちはいつも一番でありたい、また自分のやり方でいくら位得られるかという計算をし、熱狂的な競争をし続けて、不運がずっと続いてしまう。神が必要以上に豊かに私たちに与えてくださっていることを見るようになってはじめて、私は落胆の繰り返しで終わらなくなり、平行線で終わらない喜びをもって、最後の者が突如として最初の者になるということも祝いはじめるようになる。　アーメン